



『リリウム』でのS・リヴァ、A・コジョカル、C・ユング、A・マルティネス Photo: Dance Europe

1月号の主な記事： ノイマイヤー新作『リリウム』

ハンブルク・バレエが、ジョン・ノイマイヤー振付の新作『リリウム』を初演しました。原作は、フェレンツ・モルナルによる同名の戯曲。1909年にハンガリーで発表された際の評判は芳しくありませんでしたが、11年後のブロードウェイでの上演で高く評価され、4度映画化もされています。ロジャース&ハマースタインのミュージカル『回転木馬』も、ここから生まれました。今回のバレエ化にあたりノイマイヤーは、ミシェル・ルグランに音楽を、フェルディナンド・ヴォーゲルパウアーに美術を委託しました。さらに贅沢なことに、ヒロインのジュリー（ユリ）役には、今や聖性さえ感じさせるバレリーナ、アリーナ・コジョカルが招かれました。

『リリウム』の開演前の客席の照明は暗く、舞台の白い紗幕の向こうには、何百もの電球が星のように瞬いていた。大恐慌時代のアメリカを舞台に、回転木馬の呼び込みを生業とするやくざ者のリリウムは、若く無垢なジュリーと恋に落ちる。嫉妬した回転木馬のオーナーが彼をクビにしたことから、二人の転落が始まる。リリウムは怒りにまかせてジュリーに手を上げるようになり（戯曲の中では、一度しか直接的な描写は出てこないが）、妻の妊娠を知ると悪友フィチュルにそそのかされて強盗を働こうとし失敗、あげくに自殺してしまう。そして16年を煉獄で過ごし、犯した罪の報いとして、息子（原作では娘）の成長の様子を見せつけられることになる。贖罪の日々が終わり天の裁きの天秤に乗る前に、一日だけ地上に戻ることを許されたリリウムは、天国から星を盗み出し息子に与えようとするのだが、息子は怯え、贈り物を受け取ろうとしない。リリウムは腹

を立てて息子の頬を打ち、そのまま天に召されてしまう。バレエは天国の審判者たちが彼に愛とやさしさを注ぐ場面で幕を下ろすが、ジュリーの愛が情状酌量の余地として働いたのかどうか、観客としては判断に悩むところだ。

リリウム役のカルステン・ユンクは、軽薄で性的魅力に富む役どころが彼自身の個性に重なる部分もあるものの、しっくりとは演じきれていなかった。遊園地の場面では過大なエゴを持った人物として強烈な輝きを放っていたが、重層性を欠き一面的に過ぎるように見えた（彼自身の解釈によるのか振付家の指示なのかは不明だが）。

一転してコジョカルと踊る場面では、複雑かつ真正で、説得力のある表現を見せる。ユンクは彼女との間に誠実で親密な感情を見出し、それでこそリリウムは、ジョン・クーガー・メルンキャンプのパロディのような“下半身に密着したボトムスを履いた、ありがちなフェロモン男”に堕さずに済んだのだ。全編を通してもっとも哀切だったのが、リリウムの2つの内省シーン、すなわちジュリーが自分の子を宿したと知った時の唐突かつ控え目に描かれる静かな場面と、自殺した後一束の白い風船に繋がれて昇天して行く場面だったのも、納得のいくところだ。コジョカルとのデュエットはどれも感情を余すところなく伝えて圧倒的な印象を残し、とりわけリリウムが命を落とすまでの最後の5分間を描いたパ・ド・ドゥは、穏やかながら切迫した情感に満ちていた。

とはいえ、コジョカルが踊ればどんな作品であっても、情感は満ちるものだ。あるかなしかのジェスチャーから、天翔けるリフトでの時が止まったような感覚に至るまで、あらゆる動きが今この場で、本物の喜びやひりつくような渴望から生まれたように見える。それがコジョカルなのだ。彼女の描くジュリーは見るからに壊れやすく、一瞬たりともバレエの定型的なフォルムや柔軟な技術に逃げ込むことなく、役柄を生きることに心を傾けていた。彼女にとっては、アラベスクもルルベも「生きることの不正を超えた、高い次元に上ってゆきたい」という切望が形をとったものなのだ。ダンス・シーンがもっと多ければどれほどよかったか。ジュリーがしどころのない役というわけではないのだが、表現の多くが演技に費やされていたのだ。コジョカルの関節が悲鳴を上げ、劇場の案内係に追い出されるまでその踊りを見たいと感じずにはおれない。

皮肉なことに、コジョカルの天才を浮き彫りにしたのは、この夜の舞台に内在する問題だった。三次元の空間を自由に支配する彼女が役柄を確信をもって表現していたのに対し、群舞の演技のほとんどが平板で、まるで書き割りのようだった。サーシャ・リヴァの“ボールルームの男”やダリオ・フランコーニのフィチュル、キラン・ウェストのいかにもいそうな酔いどれ水兵などの例外はあったが、全体として観客を納得させるだけのリアリティが不足していたのだ。

ノイマイヤーの『リリウム』には、確かに一見の価値がある。だが原作戯曲のバレエ化の決定版には至っておらず、注ぎ込まれた才能の多大さからすれば、もっと瞠目すべき作品になっていてもよかったのではとも思う。（訳：長野由紀）